

# 天保期における寄場組合村大惣代と

## 関東取締出役との情報交換の実態と特質

——武州足立郡新染谷村守富家文書から

岩田みゆき

### 一 はじめに

寄場組合村および関東取締出役についての機能・性格については、既に多くの研究がある<sup>(1)</sup>。しかしながら、関東取締出役と村とのかかわりの中で、特に組合村惣代とどのような関係にあったのか、組合村惣代がどのように出役の業務に対応したのかなど、いまだに詳細が不明な点が多い。本稿では、従来の研究ではその実態が十分には明らかにされていない、関東取締出役と寄場組合の惣代との情報交換の実態と特質について検討するものである。

本稿で検討する史料は、大門宿寄場組合の大惣代守富家に残された、「天保三年六月 御取締向内密御用状控帳」<sup>(2)</sup>である。この史料は、天保三年辰九月から天保八年酉七月までの関東取締出役と組合村大惣代守富家との間で極秘に

交わされた御用状の内容を記録したものであり、出役から惣代に宛てた書状と、惣代から出役に宛てた書状の両方が記録されている。この史料を「情報」という視点から検討することによって、組合村大惣代という立場における村落上層民の位置や性格を、関東取締出役との関係性において明らかにすることができる。<sup>(3)</sup> しかもそれぞれの活動の実態と特質を村方の側から具体的に知ることができるのである。

以上の視点に基づき、二では両者の間で、どのような内容の情報のやりとりがあったのかということについてその実態を明らかにしたい。三では、情報交換の実態を差出人と宛名の関係性に注目し、関東取締出役と大惣代との関係性についてその特徴を検討してみたい。四では、出役・惣代それぞれについて情報収集・交換の特質について明らかにし、なぜ守富家が惣代に選ばれたのかという問題も含めて、惣代である村落上層民の性格について考えてみたい。

## 二 「御取締向内密御用状控帳」の内容について

この「御取締向内密御用状控帳」には、天保三年から八年の約五年間に、関東取締出役と大門宿組合村大惣代守富家とのあいだで交わされた六三通の御用状の記録がある。このうち関東取締出役から惣代に宛てたものが三九通、大惣代から出役に宛てたものが一四通、惣代から他組合の惣代に宛てたものが一通、そのほか宛名・差出人が不明または記録として残されているのが九通である。また、書状からわかる範囲内で、この五年間に出役が取り扱った問題は、一件であり、その内容は、(1) 改革筋取締強化に関する通達、(2) 加持祈禱・狐遣いの取締、(3) 芝居興行に関する取締、(4) 無宿・悪党の取調、(5) 押し込み強盗の取調、(6) 親不孝者の取調、(7) 欠け落ち者の取調、(8) 金銭貸借に関する取調、(9) 酒造関係の取締、(10) 御鷹餌刺不法の探索、(11) 用水普請の不正取調、に大きく分けることができる。

ところで、関東取締出役の取締の内容については、文政十年に、幕府は関東取締出役を通じて四〇カ条を組合村々に通達しているが、それについては大口勇次郎氏によって①悪党・無宿人の逮捕、②村落内の風紀取締と儉約奨励、具体的には芝居・相撲などの興行の自粛、祭礼の簡素化、③村方商人の把握・統制、農間余業の調査、④職人手間賃・旅籠代抑制などの経済統制の四つにその活動内容が要約されている。また天保四年には、一揆防止や米価抑制などの飢饉対策にも関東取締出役が深く関わっていたこと、さらに天保七年には既に物価・厩米・酒造制限、幕府河川普請の監察、鉄砲改めなどが新たに関東取締出役の業務に加えられていたことが記されている。<sup>(4)</sup>本稿の史料によると、文政十年の仰せ渡しに該当するものは、次にみる内容の(1)(3)(4)(5)(6)(7)(10)であり、(9)についても天保期には取締の対象となつてゐることが知られてゐる。だが、(2)の加持祈禱・狐遣いの取締、(8)の貸金に関する取調については新たに確認される内容であろう。もっとも(8)については後述のごとく出役自身は自らの業務ではないと断つてはいるが、村の方から出役に対して調査依頼があつたことが確認されるのである。以下、表1を参照しながら(1)から(11)まで、それぞれについて内容を検討してみたい。

# (1) 改革筋取締強化に関する通達

これは、天保三年六月二十七日付で関東取締出役吉田左五郎から大門宿組合大惣代新染谷村勇左衛門・同風渡野村義七・岩槻組合大惣代小深作村儀兵衛の三人に宛てて出された書状である。これによると近年村役人のもので「改革筋」を守らないものが増加し、「其筋」からそのような村役人たちを取り締まるようにとの命令があつたこと、このような命令が出るといふことは、「何方方欽申立候向有之」、自分たちは羽生領あたりのものではないかと見込んで、内々に調べてみると特に問題はないようである。もし、「近村村々役人共方内々たり共申立候哉之風聞も有之候哉得与内々相探」り、「有無急継早々被申越候様」と依頼したのである。また、この調査は、「呉々も極密探与被相心得」る

表 1 「御取締向内密御用状控帳」の内容

○：担当者

関東取締出役																		
No.	取締の内容	御用状の内容 出役→惣代	点 数	御用状の内容 惣代→出役	点 数	御用状の内容 惣代→惣代	点 数	不明 点数										
									吉田左五郎	小池三助	内藤賢一郎	太田平助	畔柳与四郎	河野啓助	堀江与四郎	直原喜作	不 明	
1	改革筋取締強化に関する通達	改革筋を守らない村役人の風聞の真偽の探索依頼	1						○									
2	加持折禰・狐遣いの取締	速捕の手筈の依頼 風聞の真偽の探索依頼・探索範囲の指示	2	調査報告 探索の承諾	1	富士講先達の探索依頼	1		○									○
	狐一件乗りだしについて 豊島郡下赤塚村御嶽山講中狐遣い一件 鳩ヶ谷宿庄兵衛富士講先達折禰取締一件	風聞の真相の探索依頼	1															○
		風聞の真相の探索依頼	1							○								
		風聞の真相の探索依頼	1									○						
		風聞の真相の探索依頼	1															
		風聞の真相の探索依頼	1															
		風聞の真相の探索依頼	1															
		風聞の真相の探索依頼	1															
		風聞の真相の探索依頼	1															
		風聞の真相の探索依頼	1															
		風聞の真相の探索依頼	1															
3	芝居興行に関する取締	吉五郎及び出身村領主内札依頼	3	探索報告	1				○									
4	無宿・悪党の取締	大戸村辰五郎手配一件 武州埼玉郡慈恩寺郷百姓伊助召捕一件 西村悪党兩名逮捕一件 桶川宿市切博突御手入一件 青柳村要助市切博打一件	3 1 5 2	逮捕の承諾・探索報告 (命令に従い行動、捕り物の参加)	3 1 3 2				○ ○ ○ ○									



## 天保期における寄場組合村大惣代と関東取締出役との情報交換の実態と特質

[illegible]

こと、という内容であった。このような内容の通達がこの時期に出されたということは、文政改革で開始された取締向きが弛み始めており、出役たちの取締が必ずしも村々に行きわたっていないことを予測させる。また、この「御取締向内密御用状控帳」が、この天保三年六月の通達から記録が開始されていることは、この取締強化をきっかけにして記録が開始された可能性があることを示している。

## (2) 加持祈禱・狐遣いの取締

狐遣い、加持祈禱など民衆の心を惑わすものとして、取締の対象となったものについては非常に多く、一四通七件の記載がある。これらは当時の富士講・御嶽山講などの庶民信仰の流行を背景とするものであるが、その信仰そのものが取締の対象になったのではなく、講中と称して狐を遣い村人をだますものの存在が取締の対象になっている点に注意を要する。いくつかの特徴的な事例をあげて検討してみたい。

まず天保三辰年豊島郡下赤塚村御嶽山講中狐遣いの探索に関する一件についてみてみたい。天保三年十一月に寺社奉行土井大炊頭の下知により関東取締出役から惣代に対して次のような通達が出されている。すなわち、武州豊島郡、足立郡あたりにおいて信州御嶽山講中と号して加持祈禱をしている修験あるいは俗人が数人いて、特に豊島郡下赤塚村真言宗泉福寺・同郡土支田村本山修験玉蔵院・下赤塚村新平坊・同村源之助方・同居医師文房等の四名は、尾崎狐を遣い人心を惑わしているという風聞がある。従って、密かに探索し、「狐ヲ遣候もの儀無相違御吟味御手掛り可相成程之儀有之ものハ勿論仮令狐ヲ遣候由ハ不取留儀ニ候共御嶽山先達与号猥ニ講中杯取立怪敷祈禱致し候もの其外俗人ニ而修験同様加持致候段無相違相聞候ものハ召捕相成候」というものである。

また、同じく閏十一月二十五日付の出役から勇左衛門宛ての御用状によると、風聞の探索については、豊島郡下赤塚村・川口・蕨あたりは板橋宿問屋市右衛門がおこなうので、足立郡岩槻・中山道筋については勇左衛門方で探索するように、また召取は惣代のほうでやるようにいつてきている。このように探索の範囲が出役によって設定されて

いるのであるが、惣代たちの担当範囲は自分たちの組合内部に収まらず、かなりの広範囲にわたっていたことがうかがえる。閏十一月二十六日にはこの出役からの依頼に基づき、岩槻宿御用先にいた新染谷村名主勇左衛門から吉田左五郎に宛てて、探索を承知する内容の書状が出されている。

また、天保七申年九月武州足立郡立野村氷川明神前本山修驗光明院龍玉狐付に関する件は、寺社奉行間部下総守から勘定奉行内藤隼人正に掛け合つて関東取締出役に下知になった事件で、天保七年九月五日関東取締出役吉田左五郎・内藤賢一郎から新染谷村勇左衛門に探索命令が出たものである。この一件の内容は、伊奈半左衛門支配所武州足立郡立野村氷川明神前光明院の龍玉という修驗者が、同国尾ヶ崎新田郡蔵悴善右衛門の女房多美の病気を治すため祈禱をおこない、一度は治つたのであるが、また悪くなつたので再び龍玉に祈禱を頼んだところ、多美が龍玉に狐を付けられたと口走つた。そこで郡蔵らは早く狐をはなすように頼んだのであるが、龍玉としてはその覚えはなく、かつてそんな悪名をたてられては職業にも差し障りがあるため郡蔵を相手どつて出訴に及ぶ旨を申し出ている。しかしながら多美の言い分では、龍玉に祈禱を頼んだ時に「少々之謝礼ニ而者相離申間敷旨龍玉と申付候杯其外品々口走全同人祈禱料為可食取多美江狐ヲ附却而右躰之儀申掛候」ということがあり、龍玉の仕業のようにもみえるが、一方で、龍玉は「同人たみ江狐ヲ附前書之通口走候段乍弁居却而郡蔵相手取及出訴候も不都合之儀然上者龍玉江遺恨ヲ含候者等多美ト狐ヲ附龍玉仕業之趣為口走候儀ニも可有之哉」との疑問も生ずるのであり、その点について「専ら御吟味御手掛り可相成儀探索早々風聞之趣巨細書取被申聞度候事」と、その真偽の探索を依頼したのである。

また天保七申年十月武州多摩郡上薬師村本山修驗大蔵院・吉祥院狐遣い祈禱に関する一件は、大原能登守の下知により探索が始められている。内容は、武州多摩郡上薬師村本山修驗大蔵院が狐を遣うということで捕らえられたが、調査を進めていくと問題の祈禱を伝授したのが大蔵院の伯父の武州足立郡内野村氷川明神別当本山修驗吉祥院であり、この吉祥院も狐を遣うという風聞がある。従つて、早々に吉祥院の行状を探索し申し出よ、というものである。この

御用状は、九月二十一日府中の出役小池三助から新染谷村勇左衛門に、府中↓清戸↓引又↓与野↓大宮↓新染谷という経路で村継ぎで通達されている。この小池三助からの御用状は翌日届き、その命に従って、勇左衛門はさっそく探索を開始し、二十四日には小池三助に宛てて、村継ぎ片柳↓大宮↓与野↓引又↓清戸↓府中の経路で次のような報告をおこなっている。この勇左衛門の報告によると、吉祥院は、行状はよろしくないが狐遣いの風聞は全くないといっている。また大蔵院御糺中であるため、取りあえず急いで報告をしたともいつている。この報告に対して出役吉田左五郎から勇左衛門に宛てて、三日後の二十七日に礼状を出しているが、これをみると、後述のごとく、出役は、大門宿組合だけでなく、鳩ヶ谷組合の方にも同様の探索命令を出し、両者の情報を照合したうえで判断していたことがわかる。

### (3) 芝居興行に関する取締

これについては、一通のみの記載がある。まず辰八月十五日に、上州新田郡木崎宿御用先の吉田左五郎から大惣代勇左衛門・義七・城兵衛の三名に宛てて、「吉五郎摺りもの」に関する問い合わせの御用状が出されている。問い合わせの内容は、岩槻において吉五郎の浄瑠璃興行の摺りものを内々に受け取ったところ、吉五郎の興行がおこなわれるのが土岐豊前守知行所とのみ記載があり、どこの村かが不明である。そこで「其筋」に問い合わせたところ、土岐豊前守知行所は上高野村であり、吉五郎が実際に興行をおこなっている村は下高野村であるということであった。その件についていまだはつきりしないので、摺りものに記載されているように吉五郎の興行が豊前守知行所で間違いないかどうか、それとも実は下高野村であり、「追々下高野村ハ前島太郎左衛門青沼又兵衛知行ニ相聞右知行内々吉五郎ニ候哉呉々も突留方頼入候」として「内糺」をして報告をしてほしいと依頼している。

この依頼に対して、四日後の八月十九日、新染谷村勇左衛門・小深作村城兵衛から上州新田郡木崎宿御用先吉田左五郎に宛てて報告書が提出されている。勇左衛門らの調査によると、吉五郎という名のものは見あたらず、富吉と

いう浄瑠璃語りの名があげられている。また土岐豊前守知行所上高野村は特に関わり合いは見あたらず、吉五郎の件と富吉との件は別件の可能性があるのも、もしそうであるならばまた沙汰をまつて調査をするといってきた。報告に対して出役吉田左五郎より九月一日に勇左衛門・城兵衛に返事が来ている。すなわち、最初の吉五郎摺りもの一件と富吉の芝居興行の件について両方の問題が別件であることについてはまだ内密にしておいてほしいこと、上州の件が済み次第武州にくだってその件に取りかかることなどをいつてきている。九月六日には、吉田より「領主方細かニ被尋候節之為ニ」大惣代三人が岩槻に呼び出されている。

#### (4) 無宿者や悪党に関する調査

これは、当初から関東取締出役の取締業務であつたもので、本史料でも最も記載の数が多く、三二通の御用状が記録され、内容からみると一〇件の事件の記載がみられる。これらの御用状に特徴的なのは、犯人調査のほか実際に逮捕の段取りをつけたたり、捕り物に動員される場合が多いことである。この時期、この地域において最も多い問題は博奕打ち、無宿者の横行であり、また不法な居酒屋経営、逃亡した囚人に関するもの、などでそれに関する探索が多かったことがよくわかる。これらのうちいくつかの特徴的な事件について検討してみたい。

まず、最も多く記載がある西村悪党両名逮捕一件についてみてみたい。これは博奕打ちの西村松五郎・伊之助両名の逮捕に関する一件である。この件については、辰(天保三年)閏十一月二十五日から巳八月二十五日まで八通の書状の記載があり、その動きを知ることができる。閏十一月二十五日付吉田左五郎から勇左衛門宛の書状によると、西村兩人の逮捕について、吉田・小池ともほかの事件で多忙であり、できれば「其手」すなわち勇左衛門方の手のもので逮捕するようにしてもらいたいとの内談の書状が届いている。そして逮捕状である「證状」を同封している。閏十一月二十五日出の御用状は翌二十六日勇左衛門方に届けられ、勇左衛門は即日岩槻宿御用先から騎西町の吉田左五郎宛に返事を認めている。それによると、西村兩人を勇左衛門方にて逮捕する件を承知したこと、また「證状」を渡し



てくれたことへのお礼、西村兩人を見付け次第逮捕する件などを伝えている。翌二十七日に吉田左五郎からの返書が大宮宿経由で届けられた。また晦日には岩槻にいる勇左衛門から上尾の吉田左五郎に探索報告が出されている。この「内探」の報告書には、松五郎・伊之助兩人の行動、立ち回り先、伊之助が行方不明になったこと、伊之助女房からの聞き取りの内容などが事細かに記載されている。これをみると、勇左衛門の調査能力の高さ、機動力をうかがい知ることができるが、この探索には「夫々探方内々申付私儀ハ今晚竊ニ出立」とあり、勇左衛門の手の者が数名おり、いつも容疑者を見張っており、逐一情報を伝えていたことを予測させる。この報告に対して即日、上尾にいた吉田から岩槻出張先の勇左衛門に返事が出されている。これによると吉田左五郎は、大宮にいて「一兩日中逗留内調等有之」と多忙であり、この件について当分手がつけられないようであるならば、後日直接とりかかるが、四、五日中に解決しそうであるならばまた知らせるようにといつてきている。

ついで辰十二月三日、上尾から大宮に回った吉田から勇左衛門へ書状が届いた。それによると、大宮での調べものが終わったが、また最寄りで「俄に手当もの出来昨夜急継申越」につき、今日は島原にすること、西村一件については「御用弁次第嶋原熊吉ヲ向注進御申越可有之」、しかしながら「せき込捕外之又ハ風ニ成候而ハ不宜間呉々御勘弁厚此上御取計頼入候」と頼んでいる。また、「同勢衆へよろしく」とあるように、勇左衛門の仲間に対する配慮も忘れていない。このように出役たちも多忙でなかなか逮捕の段取りがつけられない状況であった。その後巳八月二十二日の勇左衛門からの書状によると、まだはつきりとはしていないが松五郎は既に当夏中八捕村名主七左衛門方に逮捕されているとの情報が入り、その件について勇左衛門から吉田の方に確認を求めていること、またほかの二人もそのうち捕まるだろうとしているが、この時点ではまだ解決していないようである。

また、犯人逮捕の状況をよく知ることのできるものに桶川宿市切博奕御手入れ一件がある。この一件については既に逮捕の段取りができており、辰十二月八日から十一日までの記録で逮捕までの様子をうかがうことができる。すな



わち、十二月八日上尾宿御用先吉田左五郎から勇左衛門に宛てて「兼々含之一条」すなわち桶川宿の市切博奕手入れの件について書状があり、勇左衛門・義七・小深作倅をはじめ岩槻の金蔵・利八両名を連れて明日頃出てこられるかどうかの問い合わせがあった。それに対しては記録にはないが、即日、勇左衛門から返事が出されたようである。翌九日再び吉田左五郎から書状が届いた。

「已中刻出之御用状申中刻到着奉拝見候、然ハ明日御沙汰次第金蔵・利八猶外ニ氣点きき候もの村内ニ而見立今両三人増ヲ加引連原市町江不掛様道中共人目立さる様上尾宿も表江不出大村屋義助裏口とそつと大雪故別而乍御太儀明朝四時頃ニハ是非御越有之候様呉々も無間違御頼申候……」

これによると大惣代三名と目明かしと思われる金蔵・利八らのほかに「氣点きき候もの村内ニ而見立」て連れてくるようにとあり、捕り物に村民が動員されることがあったことがわかる。またその行動は極秘中の極秘であったことがわかる。勇左衛門らはこの九日の御用状に従って即座に手配し、十日朝七時に勇左衛門・風渡野市兵衛、小深作城兵衛・庄右衛門、岩槻金蔵・利八の六人で三組に分かれ、雪の中を上尾宿の大村屋に向かい、五時半時に到着し九つ時過ぎに奥の庭から忍び出て、七つ時前に桶川宿市切博奕の現場に踏み込み、頭取三人を召し捕らえている。

無宿者取調強化に関する通達がなされた時の御用状の記録もある。これは天保四年己八月二十日に、関東取締出役山本大膳手代河野啓助から岩槻組合小深作村名主城兵衛・本宿村同総右衛門、大門宿組合与頭平左衛門・同善太郎・新染谷村勇左衛門、鳩ヶ谷組合久左衛門新田名主耕三郎・舎人町同吉蔵ら三組合の村々惣代にむけて発令したもので、遊民無宿無頼ものの取調強化を触れたものであり、「悪もの之内込も改心無覚束もの并申諭之帰農改心可致もの共名前并悪事之次第ハ勿論地頭等密々取調置」、廻村の節に密かに差し出すように命令している。また「此一紙印封密々廻達追而我等共廻村之節可被相返候」とあり、この廻状が極秘のうちに廻達されたことがわかるのである。

大門・岩槻組合内悪党博打打ち・新規居酒屋営業取調内探一件は、関東取締出役堀江与四郎が鳩ヶ谷宿旅宿におい

て、組合内で博奕に携わるものまた新規に居酒屋を始めるものの名前、悪事の次第を内密に調査して帳面にして差し出すように組合惣代に申し触れた件について、勇左衛門・城兵衛から出役に提出された承諾書、および報告書である。まず、已八月二十六日付で勇左衛門・城兵衛が越谷宿辺の関東取締出役堀江与四郎宛に「私共与合生之内博奕ニ携候もの并新規居酒屋相始候もの共名前并悪事次第別帳之通内密相糺」報告している。ところで、九月一日の勇左衛門・城兵衛から鴻巣宿辺御廻先河野啓助に宛てた書状によると「去月十八日堀江与四郎様鳩ヶ谷宿御旅宿に御呼出ニ付大門宿并岩槻東西与合大惣代一同罷出候處、兼而御沙汰御差図被成下候通与合悪もの并新規居酒屋等名前悪事之次第相糺可申上旨被仰渡候間一同内探仕候處岩槻与合東西惣代之内ニ茂心底区々之もの有之右東組合ニハ御改革筋相背候もの尅人も無之旨申之ニ付右組合悪ものハ相省キ一同連印ニ而相認メ、尤右組合悪もの共私共与合迄も立入難儀ニ付尚又別段内糺之由相認別帳ニ而奉差上候ニ付此段合帳写ヲ以奉申上候、且別紙悪もの共之儀御召捕之儀ニ御座候ハ、遠方ニ而御手配被成下置候様此度弥御用弁之上ハ何卒岩槻宿ニ而御調之上御差立相成候様奉願上候、尤其節見知り人等之儀ハ御差図次第取計可申候、……」とあり、組合惣代の中にも取締に協力するものとしないうことがあり、特に岩槻宿東組合は、ひとりも組合内に悪者がいないように報告しているが、実際には岩槻東組合の悪者が隣村まで立ち入っている事実があることを告げている。もしこれらの悪者を逮捕する場合には、遠方で手配をするように、またいよいよ逮捕の場合には岩槻宿にて調査したうえで実行してもらいたいこと、また人見知りの場合には指図次第に取り計らうことなどを申し出ている。また同じく九月一日に、本庄宿御廻先の吉田左五郎にも次のような書状を出している。すなわち、堀江与四郎に呼び出されて悪者・新規居酒屋取締および内密探索について下知があったこと、また河野からも内探するように御用状がきたので、帳面に認め、惣代七人連印をして河野を通して堀江へ写しをもっていつてさしあげたこと、また惣代のうちには改革取締に協力的でない組合があることなどを同様に報告している。

大宮宿組合土呂村竹割平次郎一件については、六通の記録がある。天保四年已十二月六日中山道深谷宿御用先太田

平助・河野啓助・吉田左五郎らから勇左衛門に宛てて大宮宿組合土呂村竹割平次郎に関する探索依頼がきている。それによると「……然ハ大宮宿組合土呂村異名竹割平次郎ハ百姓之身分ニ而當八九月中ハ字天王店与申所ニ而昼夜博奕、尤村役人之内ニ茂両三人加り右店之儀ハ文政七年年中松浦伊勢守殿ハ御呼出御吟味茂有之候由、其上当十一月十日頃ハ居酒相始当月十日夜ニハ大博奕触有之候趣此節御奉行所江捨訴致候段」との噂があるが、これが「前書之通無相違候哉又ハ遺恨等有之もの之申触ニも可有之哉篤与事実」を探り、わかり次第報告してほしいこと、また「尚以店ハ何与申もの借受居住ませ候哉且地頭大目付御役中ハ決而御手入杯致候儀難成など大平ヲ申置居由、是等之当りも探り度乍然遺恨等之儀も得与精々探索入念頼入候」と風聞の真偽の確認を依頼している。十二月九日勇左衛門方から探索の結果を記した御用状を出したようだがその内容の記載はみられない。その返書であると思われる御用状が十一日に、熊谷旅宿の出役三人から届いている。これによると「……何ニいたせ遺恨等ニも敢而相聞不申其元内糺之趣与ハ齟齬其元上ニハ調違ハ有之間敷候得共若内糺ニ遣ひ候もの之人物品ニ寄泥ニも候哉与被存候間、今一応念入手ヲ替得与相糺委細御申越有之候様存候……」とあり、先の惣代の報告書と出役の探索に齟齬がみられることから、勇左衛門が内探に使った人物に問題がないかどうか、今一度違う角度で詳しく探索するようといってきた。これに対して、十二月二十三日惣代から新たな報告と自分の聞き込みとは異なっていた件を謝罪する書状が出されている。このように、出役の方も多方面から情報を収集し、それぞれについて厳密に吟味し、照合し判断材料としていたことがわかる。出役と惣代との情報交換はそのためにも不可欠であったのである。その後数カ月の間この件については通信はなかったが、翌年四月二十二日、蔵宿御用先の吉田左五郎から勇左衛門・城兵衛に宛てて片柳↓浦和↓蔵↓板橋宿継ぎで書状が伝達され、土呂村一件の状況について問い合わせがあり、四月二十四日にその返事を出している。この事件は結局この時点では解決していない。

また、以上のほかに特徴的なこととして、事件を担当する出役が途中で交替する事例が大芦村辰五郎一件や武州埜

玉郡慈恩寺郷百姓伊助召取一件でみられた。

(5) 押し込み・殺人事件

押し込み・殺人事件については、①天保六年大間木村清次郎方押し込み夜盗一件、②天保七年大山村油屋惣右衛門方へ押し込み一件、③同年中野村金右衛門殺害一件の三件の記載がある。これらについては、それぞれ一通ずつ御用状の記録があるのみで、事件の詳細は不明である。特徴的な点をあげると、②③については、必ず熊吉・粕壁金蔵らも探索に関わりをもっている点である。確認はとれていないが、おそらく彼らは目明かしではないだろうか。

(6) 親不孝者の取締に関するもの

これは、武州足立郡大宮宿はたこや勝蔵親不孝一件である。申十二月付小池三助から勇左衛門に宛てて出された書状によると、勝蔵は、桜という飯売り女を年季があけたにもかかわらず解放せず、折檻を加えて殺してしまったこと、奉公人に満足に食事を与えていないこと、忤武八も悪人であること、召使いの女をいじめていることなど、七十余になる母がいるにもかかわらず良くない噂があるので、その風聞の真偽を探索するように出役から依頼があったのである。

(7) 欠け落ち者の取調

圓福寺役僧本端は、圓福寺後住入札の件で不届きがあり六月二日に欠け落ち逃走したため、寺社奉行井上河内守正春より酉六月二十九日召し捕らえの下知が下りその人相書が配付された。探索の結果、百間村西光院に隠れ住んでいるとの情報があり、金蔵が突き止めたら早々に召し捕らえ通達するようにと、同日小池三助から勇左衛門・岩槻宿九郎左衛門に伝えている。また、この御用状は「右御用状六月廿九日申上刻 磯辺出 木曾 小野路 坂浜 布田 内藤新宿 板橋 岩淵夫と大宮 新染谷迄七月朔日丑上刻ノ相達」とある。

(8) 金銭貸借関係の調査

これは、金銭貸借にからむ調査の依頼である。天保四年巳八月小池三助のもとに百間中村組頭弥兵衛より次のような問い合わせがあった。「然ハ岩槻宿本陣平次郎姪之由いと儀深作村名主七兵衛方ニ滞留罷在、前条弥兵衛子細不相分過分之金子借用致度不法之儀申掛候由ヲ以弥兵衛右いと相糺呉候様願出」た、すなわちいとが弥兵衛に過分の金子借用の申し出をしたため、不審に思つた弥兵衛がいと的身上調査を依頼したのである。しかしながら関東取締出役としては「右ハ拙者共取扱候筋ニ無之、孰之様方ニ而双方承正候之上相当之取計方可有之与存候間差出し候書状共差遣候間与得書面熟覧之上弥兵衛へも始末糺し可然取計可給候、いとと申女甚悪党もの之由ニ相聞候間是また申進候」として巳の八月朔日に小池三助から小深作城兵衛・新染谷勇左衛門・本宿惣右衛門に始末を依頼したのである。

これについて八月十三日三名から小池へ報告があり、「双方江異見 別紙濟口之通熟談為致候間右始末其迄ニ而御聞流被成下置候様願上候」ということで村方の方で始末がついたようである。しかしながら「何卒御廻村被成候様奉願上候」と追つて書きがあり、組合村惣代のみでは取締が行き届かないため、出役の廻村を促す文面が続いている。また、この件については、吉田左五郎にもその経緯と結末の報告を怠っておらず、「先達而薄々御噂ニ承知仕候百間中村与頭弥兵衛岩槻宿本陣平次郎姪いと方不法被申掛候始末小池様江御願申上候趣ニ而御同人様方御沙汰ニ付私義武人ニ而取扱別紙写之通濟方為致候間右一条ハ御聞流し被成下度奉願候」との報告を巳八月二十二日におこなっている。このように、惣代たちは出役たちへの連絡を怠らず、しかも情報というものに極めて敏感に注意深く対処していることがよくわかる。また、惣代は組合内の借金問題・身上調査にまで関わるようになっていたことがわかるのである。

(9) 酒造りに関する不正の調査

酒造に関する取調は、①杉戸組合大惣代篠津村名主次兵衛古米元入いたし偽酒造一件、②天保三年宮下村八十兵衛酒売一件再調の義、③申年十月越後出生平八酒造調べ一件の三件の記載があるが、その中からまず①杉戸組合大惣代



篠津村名主次兵衛古米元入いたし偽酒造一件についてみてみたい。

これは、杉戸組合の大惣代で酒造家である篠津村名主次兵衛が当秋古米で酒造りをしたという風聞があり、次兵衛が本来それらを取り締まるべき立場にある組合村の大惣代であることから、風聞が立ったことじたい放置できない問題であったようであり、「第一右様風聞相立候而ハ御取締筋御威光ニも拘り何レニも難打捨次第」であるとしている。

次兵衛宅も何も申し立てないので事実を突き止めることができないため、「兎角蔵之親司同士ならてハ難突留間一ッ此所弥法ヲ以内密積探事実印封御申越有之候様致度何分御申合頼入候」として十月二日鳩ヶ谷御用先吉田左五郎から同じ造り酒屋仲間である平岡対馬守殿知行所埼玉郡樋口村名主弥市にその探索を依頼している。

②宮下村八十兵衛酒売一件では、「小池三助江及内談候処、大宮組合遊馬村ニも同様之趣意引受居候間尚其節宮下も一同引受間其段其元江合候ため序ニ申入置呉候様申之ニ付此段兼而御含可有之存候事」とあり、同様の事件に複数の組合が取りかかることがあり、これについては吉田から勇左衛門の方に連絡がなされているのである。

#### (10) 御鷹餌刺共不法探索

これは、御鷹場の役人である餌刺どもの職権乱用に関する取締である。まず、酉二月小池三助・直原喜作から勇左衛門に出された御用状によると、御鷹方が出先において使用する人足の扶持米の受け渡し方法について、天領については御鷹方から人足を出す村々に手形を渡しそれを支配役所に提出して受け取っているが、私領ではどうしているのかその方法について探索すること、また御鷹方より村々に渡した手形を野廻りのものが借用し扶持米を受け取って、その村へ扶持米を渡さないでいるものがあるとの噂があり、これらについて「其最寄仕来極秘相探被申聞候様致度候」というものである。

また、戌五月には、深谷遠江守から「御鷹餌差共関東内泊歩行右御用之權威ニ而及不法且村方之もの共も不法無之ものニ而も軽率ニ取計候事之由 右風聞相糺早々可申聞事」との下知が下り、それについて七月六日に、関東取締出



役内藤賢一郎から十丈村兵右衛門・元郷村三右衛門・染谷村林右衛門・舎人村吉蔵・伊興村林蔵・苗塚村作右衛門・大門宿平七・新染谷村勇左衛門・小深作村城兵衛・本宿村惣右衛門・騎西町善兵衛・篠津村次兵衛・羽生町彦兵衛・川俣村鞍之助・加須村惣七・八甫村渡辺七左衛門・青柳村重次郎らの足立郡・埼玉郡・葛飾郡にわたる各村々の惣代に宛てて御用状が内密に通達された。これによると、御鷹場の餌刺しの中に、鑑札一枚につき四、五人も同行し、鷹場村々にて止宿飲食をおこない職権を乱用しているものがあるとの風聞があり、従って組合のもので、餌刺しもおこなっている不法行為はもちろん、村々での対応の仕方についても事細かに調査し、その実態をありのままに報告するように、またこの件については内々の調査であるので外部に漏れないようにするようにつてきている。

(11)「身沼」井筋用水普請見積もり不法探索

これは天保七年申年九月二十七日吉田左五郎より勇左衛門に宛てて出されたもので、身沼井筋の用水普請の見積もりに関する取調である。見積もりを高くとって手抜き工事をしていないかなどの詳細な調査を極秘でおこなうようにとの依頼であり、それは御勝手方からの御沙汰であることを告げている。これは用水御普請役への内々の取締でもあったと思われる。

以上煩雑さを顧みず、本史料に記録されている関東取締出役と惣代たちとの間で交わされた御用状の内容について、それぞれまとめ一通り紹介してみた。これらから指摘できる点をまとめておきたい。

第一に、表1をみても明らかのように、ここでみられた内容は、いずれも、天保期という时期的な特徴あるいは関東という地域的な特徴が出ていると思われるが、狐付・加持祈禱をもって村民を惑わすものの取締に関するもの、博奕打ちなど悪党無宿者無頼ものの取締に関するものが多い。また御鷹餌刺し・用水普請に関する取調など、公職の不正の取締に関するもの、杉戸組合大惣代の酒造に関する不正問題など同じ組合村惣代の不正の探索など、各種惣代や村

役人たちの取締なども内密におこなわれていたことがわかる。

また、文政改革の取締条項については明文化されており、村々に御触れとして回されていたのであるが、一方で天保期に入って、明文化されたものには直接的には該当しないような問題にも出役や惣代たちが関わるようになっていたことがわかる。それは、例えば（８）でみたような、借金に関する村方からの身上調査の依頼がある。これについては結局出役は職務外として大惣代にその処置を委託しているが、このようなごく日常的な問題に至るまで村人からの調査依頼が直接出役になされているのである。また、狐遣いや加持祈禱など人心を惑わし、金銭をだましとるような事件の取り扱いが多いことからすると、この時期においては、関東取締出役が村人にとって、村民に迷惑をかけるものの取締、村の秩序維持など、不正を糾すために奔走する身近な存在としてとらえられていたことがわかる。

第二に、出役から惣代に向けて出された御用状の内容は大きく分けると、風聞の真偽の探索依頼、犯人探索依頼、逮捕の際の手筈および惣代の出張・人足の差しだし命令、逮捕命令および「證状」の送付、探索範囲の指示、取締強化の通達および調査命令、担当者の交替・行動などに関する通達などである。しかしながら、ここで最も注目したいのは、噂・風聞の真相の究明、犯人逮捕の証拠となる正確な情報の提供が通常は最も出役たちが惣代たちに期待していたことであったという点である。これも、惣代に任命されるのが豪農層であり、その経済・文化・政治的ネットワーク、人間関係・情報網に探索網としての期待をかけていたからであろう。

第三に、惣代から出役に出された御用状については点数は出役から惣代に出されたものより少ないのであるが、風聞や犯人逮捕の探索報告などその報告内容は詳細であり、出役から依頼された情報の収集のために手を尽くして奔走している姿が御用状からよくわかる。惣代から惣代に出されたものについては事件の発生した地域が他組合内である場合にその組合のものに探索を依頼したものであり、惣代同士の横のネットワークをうかがわせるものである。このように依頼された調査については詳細な情報を提供しているが、自分自身や自分の村に関する情報についてはほとん

ど触れていない点は注意を要する。そこには後述のごとく惣代自身による一定の情報操作の存在を考えなければならぬ。

第四に、表1には、それぞれの事件ごとにそれぞれに関わった八人の関東取締出役の氏名をあげておいたが、この表からもわかるように、吉田左五郎、小池三助らの名が全般にわたって頻出することがわかる。また、特に広域が取締対象となる無宿悪党の取調、押し込み強盗の探索などの事件では、多くの出役がそれに関わっていたことがわかるのである。

### 三 関東取締出役と組合村大惣代との関係性

二では、組合村大惣代と関東取締出役との間で取り扱われた事件の内容について検討した。ここでは御用状の差出人と宛名に注目し、出役と惣代との関係性についてみてみることにしたい。<sup>(5)</sup>

表2、表3は、本史料をもとにその関係性をあらわしたものである。表2によると、出役から惣代に向けて出された御用状は全部で三九通であり、そのうち吉田左五郎からのものが二二通で最も多いことが特徴的である。吉田左五郎について御用状のやりとりが多いのは小池三助であり、七通の記載がみられる。その他単独で御用状を出しているものは河野啓助・畔柳良四郎・内藤賢一郎であるが、いずれもそれぞれ一点のみである。太田平助・直原喜作は連名で出しているもののみで、点数も一ないし二点にとどまる。出役は、一地域を数人が担当し、取締にあたっていたことが知られているが、この時期この大門宿組合・岩槻宿組合・深作村組合・粕壁宿組合などのこの地域の取締にあっていた出役が八名であり、そのうち特に大門宿組合大惣代守富家との関わりが深かったのが吉田左五郎であったことがわかる。また吉田左五郎と小池三助は、行動を共にしたり、担当事件を交替したりするなど親しい関係にあった

新染谷村勇左衛門ほか2名	新染谷村勇左衛門ほか7名	新染谷村勇左衛門ほか16名	その他	総数(通)
4	1		2	22
1			1	7
	1			1
				1
		1		1
				2
				1
				1
				2
1				1
6	2	1	3	39

らしく、従って、守富家との書状のやりとりも他の出役に比べると多くなっている。

一方宛名の方に注目すると、いずれも大門宿組合新染谷村勇左衛門に宛てられたものであるが、その中には勇左衛門個人に宛てたものと他組合の惣代とともに連名で宛てたものが一九通で圧倒的に多く、これらのうち一〇通は吉田左五郎からのものであり、このことからしても、吉田左五郎と勇左衛門とは密接な関係にあり、情報交換を頻繁におこなっていたことがわかる。宛名が連名になっている御用状についてみると、勇左衛門のほかには岩槻組合小深作村城兵衛や大門宿風渡野村義七、岩槻宿九郎左衛門それぞれと二名の連名の宛名になっているものが八通、小深作村城兵衛・風渡野村義七、あるいは本宿村惣右衛門、岩槻宿九郎左衛門、粕壁宿次郎兵衛らとともに三名の連名になっているものが六通、岩槻組合・大門宿組合・鳩ヶ谷組合・粕壁組合・岩槻組合大小惣代九名に宛てたものが一通、新染谷村勇左衛門のほか一七カ村の鷹場組合に向けて出さ

天保期における寄場組合村大惣代と関東取締出役との情報交換の実態と特質

表2 出役→惣代

差出	宛名	新染谷村勇左衛門	新染谷村勇左衛門ほか1名
吉田左五郎（山田茂左衛門手付）		10	5
小池三助		4	1
河野啓助（山本大膳手代）			
畔柳良四郎		1	
内藤賢一郎			
太田平助 小池三助			2
吉田左五郎 内藤賢一郎		1	
小池三助 直原喜作		1	
太田平助 河野啓助 吉田左五郎		2	
不明			
合計		19	8

れたものが一通、他村に宛てたものが一通（ただし、これは勇左衛門の覚えとしての記録である）、「其所役人中」となっているものが二通である。これらのうち小深作村城兵衛・風渡野村義七と連名になっているものが多く、勇左衛門と探索業務について行動を共にしていた場合が多いことを物語っている。宛先の多いものうち七名の記載があったものは、河野啓助からのもので、岩槻・大門・鳩ヶ谷三組の村々遊民・無頼・無宿者の取締に関し、その悪者の名前と地頭の名前を「密密取調」廻村の節に密かに差し出すようにという命令であった。これは特定の事件に対する探索ではなく、風紀一般に関する取締であり、従ってその通達範囲も広がったのであろう。また九名の宛名の記載があったのは、吉田左五郎から大門宿・粕壁宿・岩槻宿の三組合を対象に出されたもので、御改革が弛み農業をいやがり居酒屋渡世をしたり遊民・無頼となり博奕諸勝負するなど風紀が乱れていること、酒造株を拝借しながら酒造せず居酒屋渡世をしているものがあること、また岩槻新町龍泉院ら狐遣いの風聞があることについて、風聞の真偽・詳細を組合ごとに書き取って情報を提供することという内容であ

も、守富家に直接届いたものではなく、他の惣代から回覧されてきた御用状を写し取ったものかもしれないのである。また複数人に宛てたものでも、常に行動を共にしていた小深作村城兵衛・風渡野村義七ら数名と連名のものと、六人から十数人の連名宛てのものとは当然性格が異なるであろう。上記のごとく、大勢に宛てた御用状の内容は、取締一般に関するものが多く、それも事務的な通達であったのである。

表3 惣代→出役

宛名 差出	吉田左五郎	小池三助	堀江与四郎	河野啓助	吉田・小池	太田・小池	その他	不明	総計 (通)
新染谷村勇左衛門	5	1					1		7
新染谷村勇左衛門 小深作村城兵衛	2		1	1					4
新染谷村勇左衛門 風渡野村義七					1	2			3
新染谷村勇左衛門 小深作村城兵衛 本宿村惣右衛門		1							1
不明								2	2
合計	7	2	1	1	1	2	1	2	17

った。これも特定の事件の探索を含んではいるが、一般的な風紀の取調命令の通達の内にはいるであろう。また一七名の記載のあったものは、内藤賢一郎からのもので、御鷹場餌刺どもの行状調査に関するものであった。従って御鷹場組合が探索の対象とされたため、かなりの広範囲になったものと思われる。「其所役人中」とあるのは、いずれも逮捕状である「證状」の宛名の記載方法である。組合村惣代ではなく役人中とのみあるのは、惣代のみでなく村役人一般に徹底するためであろう。

ところで、これらの事例をみてもわかるように、個人から個人に宛てたものと、個人から複数の人間に宛てたものといったような宛名の範囲の違いは、御用状の内容の違いにも反映されていることが予測される。個人から複数人に宛てたものは、当然その宛名の人々に回覧されることが前提であり、守富家の御用状の控帳に記載されているもので



そこで、その点の違いをみるために、特に守富家とのやりとりの多かった吉田左五郎から出された御用状に限定してその内容を検討してみることにした。まず吉田左五郎から守富家個人に宛てたものについて実例をあげて検討してみたい。既述のとおり、吉田個人から守富家個人に宛てて出された御用状は、辰十月二十八日、閏十一月二十七日、八月一日、十一月十三日、閏十一月二十五日、閏十一月晦日、十二月三日、十二月八日、十二月九日、申九月二十七日の一〇通であるが、例えば、辰八月朔日付御用状をみると、「狐遣ひ内糺被申越候書面曾我様江差出明日有無御沙汰有之候筈右者売薬并金錢遣人等糺ニ至り尻付可申儀与心得候、其通ニ候哉昨日小深作へ幸便一寸其儀申遣候、且岩槻領釣上変死人内糺始末風聞書小池与一同之事故一同ニ致度間其心得ヲ以御申越頼入候、四日迄ニハ上州新四郎へ急御用向中五道ヲ登り廻村之心得ニ候」とある。この御用状からいえることは、吉田が当該事件について自分の予想が正しいかどうかの確認を勇左衛門にしている点、その件について小深作村城兵衛へも御用状を出したことを勇左衛門に連絡していること、本件については小池三助とともに扱っている点、そのように心得て連絡をするようにといている点、また自分の行動の連絡を逐一入れている点が注目できる。内容も狐遣い一件のほかは岩槻宿釣上変死人の事件の風聞についても記している。また、辰閏十一月二十五日付御用状によると「……然ハ別紙内密糺書取遣候間御落手右ニ而御承知豊島郡下赤塚村土支他村并同郡中其余川口蔵辺之儀ハ右村々専之趣意ニ付糺方板橋宿問屋市右衛門方江申遣候間足立郡岩槻并中山道筋左右ニおゐて先達并俗人之分都而書取之趣含密々不聞様御含糺方有之度……一先日鳥渡乍延引御用答申入候、西村両人之もの此程其手ニ而手当御用并相成候様いたし度如何可有之哉及御内談候、拙者も昨日迄十一日鴻巣宿ニ小池氏与長々悪党共四人取調昼時差立同氏ハ一ト先引取直出立……宮下村酒屋一条先日小池江も直ニ其元方も被申聞候由右者七月中承伏差止メ又候相始候手続書面ニ書取差出有之候得共其上勘弁取計度間右書面小池氏江差出被置候様同氏昨日内話も有之間此段申入置候 右之段早々得御意度如此候 以上」とあるように、複数の用件を同時に書き記して知らせている点、事件に関するさまざまな情報を与えている点があげられる。複数の用件について

記したものはこのほか、辰十一月三日御用状では忍領大芦無宿辰五郎一件にとりかかったことと慈恩寺郷伊助一件について担当を小池に任せたことなどを知らせている。また申九月二十七日御用状では、吉祥院狐遣い一件や身沼井筋普請目論見不正調査の取調の依頼をおこなっている。このほか、閏十一月晦日付御用状に「貴様岩槻江引戻様子逐一注進状之趣致承知」とあるように、逐一連絡をとっている点、辰十二月三日付御用状に「尚々同勢衆へよろしく」と勇左衛門の仲間内への挨拶も忘れない点などが特徴としてあげられる。また、辰十二月桶川宿市切博奕の手入れの時には、細かい手筈まで指示を与える御用状を勇左衛門に出しているが、吉田左五郎はまず勇左衛門に連絡をとり、勇左衛門から他の組合村惣代に連絡をとり行動に出たのである。このように同じ組合村惣代でも吉田左五郎についてみるかぎりでは、実質的に勇左衛門が中心となっていた、すなわち勇左衛門に情報が集まるようになっていたことがわかる。

以上からその特徴をまとめてみると、①複数の用件を記す。②自分たちの行動について詳細な情報を提供する。③当該事件についてほかのものに依頼した場合の連絡を怠らない。④惣代同士・出役同士の情報交換をこまめに記している。⑤勇左衛門の仲間への挨拶を欠かさない。⑥ことば遣いが丁寧であり、強圧的でない。むしろ目上の人に対して出す書状のようである。⑦逮捕についての段取りなど極秘の相談がなされる。また逮捕時には、まず勇左衛門に連絡をとる。⑧情報を受け取るだけでなく事件に関する情報を惣代にも与えるという、対等の情報交換の立場にあるということなどがあげられ、これらのことからしても、吉田左五郎と大門宿組合大惣代新染谷村勇左衛門とは特別密接な関係をもっていたことが予測できるのである。

これに対して吉田から複数の宛名に宛てた御用状をみると、全部で一通あるが、これらのうち吉田から小深・作村城兵衛・風渡野村義七らと連名になっている御用状については、例えば、辰九月一日付吉田左五郎から城兵衛・勇左衛門に宛てた御用状では、下高野村浄瑠璃摺りものの探索について用件のみであり、辰六月二十七日付の新染谷

村勇左衛門・小深作村城兵衛・風渡野村義七宛の御用状でも改革筋不取締の村役人の風聞の探索依頼についてであったのであり、ほかの七件についても例外なく、一つの用件のみの記載であった。また既述のとおり、吉田左五郎から、勇左衛門をはじめとする九名の大門宿組合・粕壁組合・岩槻組合の各惣代に宛てた御用状は、改革筋取締強化の命令であり、また「其所役人中」宛のものは、逮捕状であったのである。

第二に、一方表3は、逆に勇左衛門個人から吉田左五郎個人に向けて出された御用状について表にしたものである。これによると、勇左衛門個人で出したものが七通、勇左衛門ほか一名連名で出したものが七通、勇左衛門ほか二名連名で出したものが一通であり、大勢でまとめて出したものはみられない。これは、この帳面が勇左衛門個人の控帳であることも関係するのであろうが、惣代からの報告は、基本的には各自で単独で、あるいは近隣の組合二、三名でおこなわれており、この場合探索の内容を数組合で共同で、村側で調整して報告することはなかったことを示している。それは、この探索が御用としての性格をもちながらも、村内外のものに対しても極秘におこなわれる場合があることも関係する。出役は、それぞれの惣代が別々に提出してきた情報を突き合わせてその真偽の判断をしていたのである。また宛先では吉田左五郎宛のものがやはり多い。勇左衛門個人から吉田に宛てた御用状五点の内容をみると、①辰閏十一月二十六日付御用状では、西村悪党の逮捕状を受け取ったお礼、御嶽山講中先達らによる狐遣い一件の報告、宮下村八十兵衛酒売り一条の調査の件を承知したこと、②辰閏十一月晦日付御用状では、西村悪党探索の詳細な経過報告、今後の行動の報告、③巳八月二十日付御用状では、西村悪党探索の詳細な報告、埼玉郡釣上村名主音次郎倅助四郎売女一件の動向、岩槻宿本陣平次郎姪いと借金関係取調始末についての報告、④巳十二月二十三日付御用状では、土呂村竹割平次郎ほか博奕打ち探索報告がなされている。また⑤巳九月一日付御用状では、堀江与四郎からの取締強化の御沙汰の承知の件、またその悪人・居酒屋内糺調査について岩槻東組合は協力的でないこと、青柳村博奕打ち要助の悪事の調査を継続しておこなう件など、それについて小深作村城兵衛らも探索し河野啓助にも報告

してある点などについて述べている。これらをみてもわかるように、やはり吉田個人から勇左衛門個人に宛てた場合と同様な特徴をもつことがわかるのである。すなわち、同時に進行している複数の事件について詳細な報告をおこなっていると同時に、取締に協力しない組合の存在など、在方の事情・風聞を事細かに報告していることがわかるのである。以上にみたことから、勇左衛門と吉田左五郎とは個人的な極秘の情報のやりとりがなされたのである。

第三に、出役と惣代との関係性をみるうえでもうひとつ特徴的なことがある。御用状の内容をみるかぎりでは、「内々探索有無急継早々被申越候様致度頼入候……」「……内糺いたし刻付被申越候様頼入候……」とある場合が多く、出役と惣代との関係は、探索そのものについては命令系統上にあるのではなく、探索の依頼・協力という関係である可能性が高い。探索に関しては出役の強制力は弱いといわねばならない。それは、探索がすべて村に対しても領主側に対しても極秘に「内糺」というかたちでおこなわれるものであることも関係する。出役が情報を得られるかどうかは多分に惣代たちの情報収集能力と協力が得られるかどうかにかかっていたのであり、しかもそこには出役と惣代との親密な個人的なつながり、信頼関係によるところが大きかったのではないかと推測される。

ところで、探索が終了し嫌疑がかたまり、「証状」といわれる逮捕状が発行される時には、例えば西村悪党一件の松五郎・伊之助の逮捕の場合「右之もの義今般内藤隼人正依下知召捕候筈ニ候条若人足等入用之節ハ改有之次第丈夫之もの差出御用弁専一ニ相心得諸事差支無之様可取計候……」とあるように、勘定奉行の命であることを明記し、人足の差出しそのほか取り計らい方については命令というかたちで関東取締出役から「其所役人中」に向けて発令されるのであり、この場合においてのみかなりの強制力をもつのである。この違いは、風聞の探索がすべて極秘であり、「内糺」というかたちでおこなわれるのに対して、嫌疑がかたまり公に逮捕が通達できるようになった場合には、幕府からの命令として執行できるためであろう。

ところで以上のような関係の特性は、惣代と出役が情報交換というかたちで個人的なつながりを強くしていること、

出役にしてみれば、そうしないと職務が遂行できないという状況があり、一方惣代においては、自分たちの地域支配あるいは地域の秩序を維持するために出役に協力することによって有利に行動できるという、相互依存の関係がうかがえる。

#### 四 関東取締出役と組合村惣代の情報交換の特色

ここでは、関東取締出役・組合村惣代それぞれについて情報収集・交換の特質についてまとめておきたい。

##### (1) 関東取締出役の情報収集・交換の特色

##### ① 命令系統

本稿では、関東取締出役と組合村惣代との関係に焦点を当てており、幕府と関東取締出役との関係については検討外であるが、本史料から確認できる命令系統について記しておきたい。

関東取締出役が、勘定奉行直属の配下で、その命令に基づいて行動していることは既に多くの研究によって周知のことであり、本稿においても、天保三年の西村悪党一件は勘定奉行内藤隼人正の下知によって探索が開始されている事実が確認される。そのほか、辰閏十一月の武州埼玉郡慈恩寺領百姓伊助召し捕らえ一件の時には「(寺社奉行)脇坂中務太輔殿達(勘定奉行)内藤隼人正下知」、辰閏十一月信州御嶽山講中修験加持祈禱一件では「(寺社奉行)土井大炊頭殿御申越之御下知」、天保七年申年九月武州足立郡立野村氷川明神前本山修験光明院龍玉狐付一件では「(寺社御奉行間部下総守より内藤隼人正殿江掛合御下知」とあるなど、寺社奉行からの依頼で勘定奉行から下知が下る事件の事例がみられる。また酉六月の圓福寺役僧本端欠け落ち事件では寺社奉行である井上河内守が直接下知を下してい



る。また、身沼井筋普請目論見不正の探索については「勝手方よりの御沙汰につき」とある。これらの事実は、関東取締出役が組合村惣代に収集させた村方の情報が、関東取締出役を通じて幕府へと伝達されていたことを予測させる。

## ② 関東取締出役の情報収集能力

関東取締出役がその職務を遂行するためには、必然的に組合村の惣代の力に依拠せざるをえなかった。その場合どのように惣代の能力を利用するかが問題となってくる。罪が確定し、逮捕状が出た場合には、公に人足の動員をかけられるのであるが、そこに至るまでの調査が最も重要な問題となってくる。出役の調査は、まず「風聞」の真偽の探索から開始されるが、まずその「風聞」の有無・真偽の探索が、村方で最も情報を多く握っている村落上層民である組合村惣代たちに期待されるのである。この「風聞」の探索は既にみたように、あくまでも「内密」あるいは「極密」に依頼というかたちで惣代たちに課されるのであり、出役にとっては、情報提供に協力してくれる惣代の存在が、職務を遂行するうえで最も重要となってくる。従ってその関係は、必然的に単なる命令系統にのった事務的な関係に終わらないのである。関東取締出役から惣代勇左衛門に宛てた書状を検討したことからもわかるように、惣代と出役はこまめに情報のやりとりをし、情報を収集するだけでなく、惣代に情報を提供することもしていたのである。惣代にとっては、出役を通して事件に関する正しい情報を得、村々の秩序維持に利用することができたのである。

また、出役たちは調査にあたつてさまざまな配慮をしていることがわかる。例えば、杉戸組合の大惣代が酒造に関する不正をおこなっているという風聞の調査をする場合に、同じ酒造仲間のものに探索を依頼している。また問題の人物と距離的に近い組合に探索を依頼する。また探索範囲を適当に割り当てて効率のよい探索を考えるなど、その真相をさぐるための確実な方法を考えている。また探索には、岩槻の金蔵・利八、上尾宿拝木屋太郎吉、板橋亀五郎、島原熊吉といった人物を惣代たちにつけて動かしている。これらの人物は、特に無宿人や押し込み強盗事件などの時によく動員されていたようである。



### ③情報判断能力

関東取締出役たちは、情報というものに特別敏感であることは、「風聞」の発生源を大変気にかけていることからうかがえるのであるが、その判断能力も極めて高かったということがいえる。それは例えば、天保七年の武州多摩郡上薬師村本山修験大蔵院・吉祥院狐遣い一件にみられたように「過日者こんこん一件御骨折辱鳩ヶ谷方も申越照合候處符号御蔭ニ而能相分り大慶存候」とあることからわかるように、出役は一つの情報で判断することはなく複数の情報を収集し、比較検討し、その真偽を判断していたことを知ることができるのである。また、天保三年豊島郡下赤塚村御嶽山講中狐遣い一件でもみられたように、「風聞之次第茂不取留事故御嶽山講中江遺恨有之もの無跡形儀ヲ申触候哉茂難計間、左候ニ而内探索之上講中有之儀ハ無相違候共全く銘々信仰致候迄ニ而先達杯与号加持祈禱いたし候儀も無之前書風聞ハ全遺恨有之もの之仕業与相聞候ハ、其子細ヲ茂内探之上巨細ニ書取相分り候次第被申越候様……」とあり、風聞の内容がとりとめがないことから、このような風聞が御嶽講中への恨みから発生したものではないのか、もしそうであるならば、講中そのものの存在は銘々の信仰の自由であるので問題はないのであって、恨みをもつものが流した風聞であるならばその詳細を探索し報告するようにとしているなど、出役たちが風聞が恨みから出たものであるかどうかといった公正な立場から風聞を判断していることが知られるのである。また、大宮宿組合土呂村竹割平次郎一件でみられたように、出役の調査と惣代が提出した報告書との内容が一致しないことを指摘し、「若内糺ニ遣ひ候もの之人物品ニ寄泥ミも候哉与被存候間、今一応念入手ヲ替得与相糺委細御申越有之候様存候」とあり、勇左衛門が探索に使った人物に問題がないかどうか、今一度違う角度で詳しく探索するようにいつてきている。これらのことからわかるように、出役は非常に高い情報判断力をもつ情報操作のプロであるといえる。

### ④行動範囲

表4は史料でわかるかぎりでの出役の動きを表にしたものである。出役の中では吉田左五郎の動きが最も詳細にわ

かり、吉田は頻繁に場所を移動し多忙を極めていた様子がわかる。このように頻繁に場所を移動するということは、すなわち出役たちにとっては、その業務を遂行するにあたって情報が決定的な意味をもってくるということである。そのために各組合村惣代から風聞・噂に関する情報を入手し、それらを突き合わせ判断して、業務遂行の手はずを整えるのである。

## (2) 惣代の情報収集・情報提供の特色

### ① 惣代の情報収集について

一方、噂・風聞の真相をさぐるように依頼をうけた惣代たちはどのようなにしてその探索・情報収集を実行にうつすのであろうか。史料中には、実際の情報収集の様子がうかがえるような記載は断片的にしかみられない。しかしその収集された情報の内容の緻密さからすると、その収集能力の高さを物語っている。その収集の方法について知ることができる断片的記載をたよりにみていきたい。

まず、先に表2でみたように、御用状の宛名あるいは差出人の名をみると、勇左衛門個人のもの以外では、新染谷村勇左衛門・風渡野村義七・小深作村城兵衛の三人の名が出てくる場合が多い。これは大門宿組合と岩槻宿組合が近隣であることも関係して、これら三人が探索にあたって行動をともにしていたことが多かったことを物語っている。従って相互に情報交換をしていたであろうことは容易に推測できる。

また本稿で使用した史料の中で手掛かりになると思われる記載をみてみると、まず辰六月二十七日の吉田左五郎から新染谷村勇左衛門・小深作村城兵衛・風渡野村義七に宛てて出された御用状に「近辺村々役人共より内々たりとも申立候哉之風聞も有之候哉得与内々相探……」とあり、近辺の村々役人たちの内々の協力があつたことを示している。また、辰閏十一月晦日勇左衛門から吉田左五郎に宛てた御用状にあるように「……尚又夫々探方内々申付私儀ハ今晚

天保期における寄場組合村大惣代と関東取締出役との情報交換の実態と特質

表4 関東取締出役の行動範囲

年・月・日	出役氏名	吉田左五郎	小池三助	堀江与四郎	河野啓助	太田平助	畔柳良四郎
辰 (天保3)	8・15	上州新田郡木崎宿					
	9・20	在府					
	10・28	佐野犬伏宿					
	閏11・1		鴻巣宿				
	閏11・13	上州大間々					
	閏11・21	鴻巣宿	鴻巣宿				
	閏11・24	騎西町					
	閏11・26	騎西町					
	閏11・28	上尾宿					
	閏11・30	上尾宿					
	12・3	大宮宿					
	12・8	上尾宿					
	12・10	上尾宿					
巳 (天保4)	8・18			鳩ヶ谷宿			
	9・1	本庄宿			鴻巣宿		
	9・3～10						
	12・6	深谷宿			深谷宿	深谷宿	
	12・23						
午 (天保5)	4・22	蕨宿					
	4・24	板橋宿					
	5・14		板橋宿			板橋宿	
未 (天保6)	2・13						川口宿 上尾宿
	10・13	深谷宿					
申 (天保7)	9・21		府中				
	10・2	鳩ヶ谷宿					
	10・21	本庄宿					
	10・25	羽生宿					
酉 (天保8)	6・29		相州高座郡磯部村				

竊ニ出立候得ハ……」とあり、探索を内々に申し付けたとあり、勇左衛門の代わりに探索をする手下の存在が認められる。それが村のものなのかどうかは不明である。同様に手下・仲間の存在を予測させる記載に、辰閏十一月二十五日吉田左五郎から勇左衛門に宛てた西村一件に関する書翰の中で、「西村両人のもの此程其手ニ而手当御用弁相成度……」とあり、また、辰十二月三日の同じく吉田左五郎から勇左衛門に宛てた西村一件に関する書翰の中に、「尚々同勢衆へよろしく」とある。また天保六年十月十三日吉田左五郎から勇左衛門ほか八名に宛てて出された岩槻新町龍泉院・医師加持祈禱狐付一件に関する御用状に、探索について「其組合忝人ニ而ハ調も行届間敷候、組合ニ而廻候族江申密々談合可取調候事」とあり、惣代との関係は不明であるが、組合村々を巡回しているものの存在が認められる。「族」とあることからそれほど身分の高いものではあるまい。また、辰十二月九日吉田左五郎から勇左衛門に宛てた桶川宿市切博奕の手入れに関する御用状の中で、捕り物の際に「気点きき候もの村内ニ而見立」ててつれてくるようにとあり、捕り物に村民が動員されることがわかる。このように、大惣代の行動の周囲には、それに協力するあるいは手下として動く複数の人間の存在がうかがえるのであり、しかもそれは村民である場合もあったのである。以上のほかに、他組合村の惣代同士の情報交換、あるいは悪人の逮捕や探索時に時々名前が出てくる岩槻の金蔵・利八、上尾宿拝木屋太郎吉、板橋亀五郎、島原熊吉といった人々の協力もあったと考えられる。

しかしながらそれ以上に、組合村の惣代たちが多くの場合地域の政治・経済・文化的情報を掌握する村落上層民であり、かつ村役人層であると同時に豪農層であったこととの関わりを考える必要がある。守富家の人間関係については未検討であるが、既にほかの多くの関東豪農層の事例によって、その特質はほぼ明らかにされているように、非常に幅広い人間関係を有していた。関東取締出役は、そのような幅広い情報網と情報収集能力をもつ豪農層を利用して、個人的つながりを深めることによって取締を進めていたのであり、またこういった豪農層の協力なしにはこの時期、この地域の取締業務はできなかったのである。それは、前述のごとくわずかな人数で関東周辺の取締をおこなわなけ

ればならないのであるから、出役たちは常に移動しているものであり、また一人の出役がいくつもの事件を担当するわけであるから、出役同士の連絡にしても惣代たちの力を借りる場合が多かったと思われる。惣代たちは、一事件に複数の出役が関わりをもつ場合には、すべての出役に連絡を怠らなかつたのである。

また逆に豪農の側からみると豪農がなぜ出役に協力したのかという問題も出てくる。すなわちそれはひとつは、正確な情報が入手できるからである。出役は多角的に情報を収集し、比較検討するための多くの材料をもっている。惣代よりは広い視野から情報を判断できる立場にある。従って出役からより正確な情報を得ることができるのである。ふたつには、情報を活用し地域秩序の維持と支配に生かすためである。情報をもつことが、あるいはそれを収集するための人間関係をもつことが、地域支配と幕府・領主との関わりにおける「公」的地位の確保にプラスにつながる、またそれに伴う特権を入手できるという政治的配慮があるからではないか。

## ②惣代たちの情報操作について

惣代の情報操作の問題を考えるためには、まず、A惣代の幕府権力に対する情報操作、B同じ階層にある惣代間における情報操作、C一般民衆に対する情報操作、の三つの問題としてとらえる必要がある。

Aについては、守富家に関していえば、出役の探索に協力的であったが、それにしても依頼された取締に関する情報の提供に限られており、その内容も村の秩序維持にとつては益になるものであったのである。守富家はその限りで関東取締出役に協力したということもできる。すなわち、豪農が自分自身についてや、自分の住む村方に関する情報のすべてを提供していたわけではなく、そこには一定の情報操作が存在していたということができる。

この、情報操作という点でみると、同じ組合村の惣代でも関東取締出役に協力的でなかつたものの存在が、最も顕著に情報操作の存在を物語っている。すなわち、巳九月一日に出された勇左衛門・城兵衛から河野啓助宛の探索報告から明らかになっているように、「岩槻与合東西惣代之内三茂心底区々之もの有之右東組合三ハ御改革筋相背候もの壺



人も無之旨申之ニ付右組合悪ものハ相省キ一同連印ニ而相認メ」ということがあり、取締の対象になるものがないながら、組合でその情報を出さないでいたという組合内部での、実質的にはその組合村惣代の情報操作が存在していたことがわかるのである。また、惣代が自ら取締に反する行為をし隠蔽していた事例として、杉戸組合の大惣代篠津村名主次兵衛の不正酒造の一件もあり、この件に関して次兵衛は一切情報を漏らさないようにしていたのである。しかし噂によって疑惑が生じ、探索の対象とされたのであるが、その場合に「蔵之親司同士」ならば正しい情報が得られるのではないかということで、同じ造り酒屋仲間である平岡対馬守知行所樋口村名主弥市に密かにその探索を依頼したのである。

このように同じ改革組合村惣代でも関東取締出役の取締に協力するものとしないものがいたのであるが、その事実は何を意味しているのであろうか。指摘できる点は、ひとつは、関東取締出役に協力しない惣代の場合は組合村内部における操作がおこなわれたのであるが、しかしそれが同じ組合村惣代によって暴露されている点に注目したい。また酒造不正に関しては出役が、同じ酒造仲間に探索を依頼している点も見逃せない。さらに、御鷹餌刺の幕府の権威を笠にきた不正の摘発、用水普請の手抜き工事、費用を多く見積もるなどの不正の摘発など、それぞれの村方の役職についている上層民の不正調査も同じ村落上層民である惣代たちの手によって極秘におこなわれたのである。

すなわちここには、豪農層が自らの内なる利益を守るために必然化する、同一階層間におけるなんらかの断絶の姿がうかがえるのであり、そこに権力が介在していることがまず指摘できるのである。これはBの問題としてとりあげることができる。

Bの惣代同士の、あるいは同じ村落上層民間における情報の断絶・情報操作の存在は、Aでみたように、権力の介在によって促進されたと考えられる。権力は、村方における利害関係と密接に関わりをもつことでそれを利用し、さらに溝を深めさせたのである。

以下にみるように、出役との関係により特権を得ることによって惣代自身が同一階層から批判され、同一階層間で断絶が形成されてくる場合もあるのである。

それについては、時期も地域も異なるが、次のような事例がみられる。これは、現在の茨城県結城郡菅谷村の大久保家が文久三年に老中板倉侯に提出した意見書の中にみられる記載であるが、<sup>(7)</sup>それによると、「文政度右関八州御取締御出役有之、組合村と唱重立候者大小惣代と名ヲ付候而、御取締筋一手ニ御仁徳を御施し被遊百姓之御為筋御座候得共、当時小前百姓之悪事者取締方ハ村々取締ハ右惣代持ニ相成、御年貢取立之外ハ譬壱村之内若者少之悪事差加り候共直ニ帳外ニ申立候故、自然身之寄所ヲ失ひ無拠矣或ハ盜賊差はまり大悪事ニ相成追見捨置、終ニ御取締御役人様御手入ニ御上之御厄介と相成、不益尔命も失ひ候段誠ニ歎敷人命ヲ失候も見知居候、多分追々悪事之者出来候義無人別ニ致置候義与奉存候」とあり、文政改革で組合村ができて以来、村々の治安取締はこの惣代が一手におこなっているが、この惣代が年貢取立以外のことすべてに口を出し、独断で権勢をふるい、大したことでもないのに召し捕らえて小前百姓を安易に帳はずれにするため浮浪者が増大するのであるとして、惣代たちの行動を批判している。また「……御取締御出役人様之道案内者又者御用相勤候大小惣代、其外下使抔と唱候者寄場ニ有之、実ハ百姓ヲ嫌ひ内穴遊墮にて御召使被遊候故、矣矣者致者ハ賄賂を取今日着飾り候故、表向御制禁ニ而も内実は乍恐御免之様ニ相成居候故、自然と悪事馴安相加り候義ニ而、乍然村役人ニ而取調教諭可致筈之處、右悪序へ嚴重申聞候節者右下使等相妬御出役へ不平申立致候故、無拠前申上候通□□并大小惣代下使道案内之者ニ而右等都而取計候故見捨之帳外致候事ニ而……」とあり、惣代とその手下どもが百姓を嫌い、遊惰にすごし、博奕打ちなどから賄賂をもらっており、実質的に公認のかたちになっ<sup>て</sup>しまい、取り締まるべき惣代たちもそのうち馴れてしまつて悪事を重ねている場合があること、また、その点を村役人が取り調べて注意すると、手下のものが関東取締出役に不平を申し立てるのでむやみに注意もできない点を指摘している。この意見書は、大久保家の視点からみた意見書ではあるが、これによると、組合村の惣代が、年貢納

入以外の村役人業務にまで権勢をふるい、村役人の村内における地位が相対的に低下し、本来ならば村内で始末がつく問題まで大きな社会問題にしまったこと、またこれによって村内外の人間関係や秩序が変化し、幕府・領主からの命令系統・上申系統など情報の基本的な流れが変化し、このような一般の村役人の意見や考えが通らないような状況が形成されてしまったことをいっているのである。このことは、先にみた天保三年の改革筋取締強化の申達においても明らかで、この件では、惣代たちの探索の対象が近隣の村役人たちであり、組合村惣代が村役人たちも監視する立場にあったのである。調査にあたっては近隣であるために日常的なつきあいもあつたであらうし、村々の寄合で顔を合わせることもあつたであらうことを考えると、当然その探索は極秘でなければならなかつたのである。そこに

は明らかに権力が介在した、村落上層民間における断絶が形成されていたことがわかるのである。

Cの一般村民に対する情報操作については、具体的に史料のうえでは出てこない。しかしながら、これらの情報は噂の真相が確かめられ、その対策が決定されるまでは、御触れ・廻状で回されることはなく、探索はすべて内密におこなわれたのであり、従つて一部の手のものを除き一般村民にも知らされていなかったと考えられる。

また、村落上層民である豪農層の情報交換が主として親類関係を基礎として、武家階級・学者関係、商売上の取引関係にひろがっていくのは、一般村民も含めて、地域社会の内部に対する情報操作が存在していたからではないだろうか。従つてこれらの情報操作がはたして純粋に幕府権力から村民を守るためとのみいえるのかどうかは、これらの事例からでは回答は出せないのである。

以上、ABCの三つの方向性をもつ情報操作の実態について検討してみた。その情報操作は幕府・領主階級のみならず、むしろ権力が介在することで一般村民はもちろんのこと、同一階層に対してもおこなわれたのであるが、しかしながら、ひとついえることは、その情報操作そのものが一方で豪農層の政治性をささえていたものであつたということである。豪農とは、「内」に向けても「外」に対しても情報をコントロールする、その意味で政治性を帯びた主

体的立場にある存在であるといえる。ところで、このような立場にある豪農がなぜ村々の惣代として選ばれるのか、また豪農の中でもなぜ特に守富家が大惣代に選ばれるのかという問題があるが、今後の課題としたい。

註

- (1) 関東取締出役および改革組合村に関する研究については、『日本歴史大系11 幕藩体制の展開と動揺 下 普及版』（一九九六年七月、山川出版社）八頁、三一頁に大口勇次郎氏による研究史のまとめと解説があるので参照されたい。最近では『寒川町史3 資料編 近世3』（平成七年一月）で関東取締出役に関する資料集が刊行され巻末に大口勇次郎氏による詳細な解説がある。また最近のものでは椿田卓士氏「関東取締出役太田源助の活動について」（『寒川町史研究』第一〇号、一九九七年）、内田四方蔵「関東取締出役と幕府代官の活動と村方の対応——関口日記を題材に」（『横浜開港資料館横浜近世史研究会』『日記が語る一九世紀の横浜』一九九八年、山川出版社）がある。特に関東取締出役の情報収集活動に注目したものに佐藤隆一氏「幕末期関東取締出役による情報収集活動」（『三浦古文化』第五四号、平成六年六月）がある。
- (2) 本稿で使用した守富家文書は、埼玉県立文書館に所蔵している影印本によるものである。原史料は、慶応義塾大学所蔵である。また守富家が名主役を務めた新染谷村については拙稿「武州足立郡新染谷村守富家の御用留——幕末から明治へ（一）（二）」（『浦和市史研究』第五・六号、平成二・三年）を参照されたい。
- (3) 従来の研究が明らかにしてきたように、天保十年に「合戦場一件」といわれる関東取締出役のうち一〇名が更迭される事件が発生している。この処罰事件の性格については、出役の一斉交替を狙った政治的色合いの濃いものである可能性が高いとされている。本稿で取り扱う時期が天保三年から八年の時期であり、また後述するようにこの時に処罰されたもののうちの六名の名が史料中に出てくることから、処罰前の関東取締出役と惣代との関係のあり方を知るうえでも、またこの処罰事件の性格を考えるうえでも本史料は貴重な素材であるといえる。前掲『寒川町史3 資料編 近世3』大口勇次郎氏解説参照。
- (4) 大口勇次郎氏「天保七年「旧弊改革」と関東取締出役」（『信濃』第四〇巻三号）参照。

(5) 関東取締出役と豪農との関係を論じたものに飯島章氏「文政一二年羽生領御普請仕法替と関東取締出役河野啓助」(『埼玉地方史』第三四号、一九九五年)がある。

(6) 大門宿組合は、大門宿・下野田・玄蕃新田・中野田・大崎・辻・代山・寺山・上野田・新染谷・高畑・膝子・片柳・山・加田屋新田・新井・風渡野・門前・新堤・大谷・蓮沼・中川・御倉白岡・染谷・中丸・新右衛門新田・笹丸・中野・戸塚・長嶋・北原・行衛北原村新田・差間・間宮の三四カ村である。岩槻宿組合・深作村組合・粕壁宿組合については「岩槻市史 通史編」(昭和六十年三月)を参照されたい。

(7) 茨城県八千代町大久保荘司家文書

(いわた・みゆき 日本近世史)